

# 唐代伝奇「杜子春伝」読解についての一考察——漢文教育における比較文学の取組み

羽 田 朝 子

## A study of a Tang dynasty story, “The Tale of Toshishun”: An approach to comparative literature of the Japanese and Chinese in the context of teaching classical Chinese

Asako HANEDA

Tang dynasty stories are crucial materials for teaching classical Chinese in Japan as (1) they have figured prominently in the history of Chinese literature, (2) they have a straightforward style, and (3) their content is engaging. However, the vast difference between the historical and cultural backgrounds described in the Tang dynasty stories and contemporary Japan makes it difficult to understand the stories' themes in the context of education. To solve this problem, I used the techniques of comparative literature to improve students' reading comprehension of a Tang dynasty story, “The Tale of Toshishun.” I compared this story with a Japanese modern novel, “Toshishun,” by Ryunosuke Akutagawa, and tried to illustrate the theme of “The Tale of Toshishun” by analyzing the differences between “The Tale of Toshishun” and “Toshishun.” Consequently, students not only deepened their understanding of “The Tale of Toshishun” but also became interested in the theory and techniques of comparative literature.

### Key Words :

唐代伝奇 : Tang dynasty stories  
「杜子春伝」 : The tale of Toshishun  
漢文教育 : Teaching classical Chinese  
比較文学 : Comparative literature  
「杜子春」 : Toshishun

### はじめに

中国文学史を語る上で、唐代（618～907）における伝奇小説の登場は欠かせないものである。中国において小説というジャンルは六朝時代（222～589）に初めて登場し、すでに志怪小説、志人小説が生まれていた。しかし、これらは怪異（不思議なこと）や実在の人物のエピソードを伝承するための単純素朴な記録であり、編纂者自身も虚構を創作しているという意識を持っていなかった。唐代に登場した伝奇小説においてはじめて、小説は作者個人の創作として書かれ、筋の展開・構成に工夫が凝らされた物語としての性格を備えたものとなったのである。この伝奇小説はその後、明代に隆盛を迎える

白話小説のさきがけともなっていく<sup>1</sup>。

伝奇小説は中唐期（766～835）に登場しており、その登場の背景としては、以下のとおりである。唐詩が隆盛を迎えた盛唐期（710～765）の後、停滞した文壇では新たな模索が始められた。その一つとして、白居易（772～843、字は楽天）が友人であった元稹（779～831）らとともに、俗語や口語を用い、詩の表現を平易にすることを試み、物語詩に新境地をひらいたことが挙げられる。例えば「長恨歌」など優れた物語詩が創作され、それまでの抒情に意を用いる伝統とは異なる、物語性を重視する風潮が生まれたのである。二つめの模索として、韓愈（768～824）、柳宗元（773～819）らが六朝以来

1 中国文学史における唐代伝奇小説の位置づけ、および伝奇小説については、以下の文献を参照にした。前野直彬『中国小説史考』秋山書店1975年）、魯迅著・中島長文注訳『中国小説史略』1～2巻、平凡社1997年）、竹田晃『中国小説史入門』（岩波書店2002年）などである。

の美文（駢体文）を否定し、古文を宣伝した古文復興運動を行ったことがある。簡潔で達意を旨とする古文は、事件の具体的な表現、人間の性格や心理の細やかな描写を不可欠とする小説を書くのに便利な文体であった。こうした背景があって、伝奇小説は中唐期に華々しく開花し、中国文学史上に名を残す名作が登場したのである。

伝奇小説の内容としては、多彩なテーマやモチーフによって創作されており、とくに特徴的なものとして次の四つがあげられる。義侠心（薛調「無双伝」、裴鏞「崑崙奴」、「聶隱娘」など）、人生観の探求（沈既濟「枕中記」）、男女間の愛情（沈既濟「任氏伝」、白行簡「李娃伝」、元稹「鶯鶯伝」）そして道教や道士、仙人や仙術について（李復言「杜子春伝」）である。

以上のような唐代の伝奇小説は、中国文学史上において重要な位置を占めており、またその簡潔な文体、内容的な面白さから、漢文教育の教材として欠かせないものになっている。そのなかでもとりわけ有名な作品として、李復言（775～833）の「杜子春伝」（『続玄怪録』に所収）が挙げられる。この小説は仙人になること（上仙）への執念や上仙の難しさについて語ったもので、このテーマは当時の時代性を色濃く反映したものであった。中国において、道教は仏教とともに長い伝統をもつ宗教として人々に信仰されてきたが、唐代において仏教の影響を受け、民間の土俗的信仰から、一段と整備された宗教に発展した。とくに唐の皇帝が李氏であったことから、同じく李姓であったと伝えられる老子を、道教の最高の祖神としてあがめるようになり、また道教は朝廷の手厚い保護を受けるに至ったのである。このような状況を背景として、唐代の伝奇小説には道教や道士、仙人や仙術を語る話が多く現れたのであり、「杜子春伝」はその代表的な作品の一つに数えられる。

李復言「杜子春伝」はとくに日本で知名度が高い作品になっており、それは芥川龍之介（1892～1927）がこれをもとに翻案小説「杜子春」を創作したことが大きい。この「杜子春」は1920年6月に執筆され、その翌月に童話・童謡雑誌『赤い鳥』に掲載されたものである。これは中国古典に材を取りながらも、単なる翻案を超えた芥川独自の作為が見られ、人道主義といった近代的なテーマを描いている。また童話作品であることから、彼の作品の中でも広く読者を得ているものの一つである<sup>2</sup>。

しかし漢文教育において李復言「杜子春伝」を読解す

る際には、芥川龍之介「杜子春」の印象があまりにも鮮烈であるがために、そのテーマの読解の際に学生の誤解を招くケースが生まれている。筆者が中国古典文学に関する概説の授業において李復言「杜子春伝」を読解した後、そのテーマを学生に質問したところ、それを正確に答えた者は皆無であり、その多くが芥川龍之介「杜子春」のテーマと混同した回答をしたのである。

そこで筆者はその授業において、唐代伝奇「杜子春伝」の読解のために、日本の近代文学である芥川龍之介「杜子春」と比較し、その相違点を考察することによって、「杜子春伝」のテーマを導き出す作業を行った。本論はその日中比較文学の取組みを紹介し、その効果を考察するものである。

## 二. 李復言「杜子春伝」と芥川龍之介「杜子春」

まず、ふたつの作品のストーリーを紹介する。李復言の「杜子春伝」のあらすじは以下の通りである。

六朝時代、もともと裕福な家の息子であった杜子春という青年が、贅沢を尽くして物乞いとなり、長安の街で飢寒に苛まれていた。そこへある老人が現れ、杜子春に金銭を与える。しかし杜子春は贅沢を始め、すぐにそれを使い果たしてしまう。するとまた老人が現れ杜子春に金銭を与えるのである。これが3度目になると、杜子春は老人への感謝の気持ちから、恩返しを申し出る。果たしてその老人は道士であり、杜子春を彼の仙薬をつくる仕事場がある華山の雲台峰に連れていく。道士は杜子春に何があっても絶対に言葉を話してはならないと言い残し、立ち去った。すると妖怪や大將軍、閻魔大王があらわれ杜子春に口を開くよう詰め寄る。果てには杜子春の妻を連れてきて、目の前で拷問を加えるが、それでも杜子春は何も言わなかった。とうとう杜子春は殺されて女に転生させられ、嫁いで子をなしたが、なお口をきかなかった。あるとき、夫は妻が口をきかないのは自分を侮っているからだとし、杜子春の目の前で赤ん坊を石にたたきつけて殺してしまう。その瞬間、杜子春はおもわず悲鳴を上げる。すると杜子春の体はもとの雲台峰にもどった。道士は激怒し、杜子春を山から追い返してしまう<sup>3</sup>。

一方、芥川の「杜子春」のあらすじは次の通りである。

唐代、もともと裕福な家の息子であった杜子春という青年が、贅沢を尽くして物乞いとなり、洛陽の街で飢寒に苛まれていた。そこへある老人が現れて杜子春に黄金

2 日本文学研究の分野でも、原作の「杜子春伝」との比較を通じた比較文学的なアプローチがされている。代表的な研究に、以下のものがある。大塚繁樹「『杜子春伝』と芥川の『杜子春』との史的関聯」（『愛媛大学紀要 第1部』人文科学6巻1期、1960年）、松村定孝「唐代小説「杜子春伝」と芥川の童話「杜子春」の発想の相違点」（『比較文学』8巻、1965年）、伊東貴之「『杜子春』は何処から来たか？——中国文学との比較による新しい読み」（『国文学 解釈と教材の研究』41巻5期、1996年）、増子和男「芥川龍之介「杜子春」と唐代伝奇「杜子春伝」とのあいだ——唐代伝奇「杜子春伝」の出典と編者を中心として」（『和漢比較文学』52巻、2014年）などである。

3 テキストは『玄怪録・續玄怪録』（中華書局、2006年8月、3～8頁）を使用した。

を与える。しかし杜子春は贅沢を始め、すぐに使い果たしてしまう。するとまた老人が現れ杜子春に黄金を与えるのである。これが3度目になると、杜子春は人間に嫌気がさしており、またその老人が仙人であると見抜いていたことから、老人に対して仙術を教えてもらいたいと申し出る。その老人はたしかに仙人であり、杜子春を峨眉山に連れていく。仙人は杜子春に何があっても絶対に言葉を話してはならないと言い残すと、立ち去った。すると杜子春の周りでは、妖怪や神将があらわれて、杜子春に詰め寄るが、どうしても口を開かないので彼を殺してしまう。杜子春の魂は閻魔大王の前に引き出され、さまざまな拷問を加えられるが、それでも何も言わなかった。すると閻魔大王は杜子春の前に、馬の姿になった杜子春の両親を連れてきて、その目の前で鞭打った。母親は、杜子春の心を思いやり、じっと痛みに耐えている。その姿に心打たれた杜子春は、とうとう声を挙げてしまう。気が付くと、杜子春はもとの洛陽の街にもどっていた。杜子春は仙人に対し、自分は仙人になることは諦め、人間らしい暮らしをするつもりだと告げる<sup>4</sup>。

### 三. 李復言「杜子春伝」と芥川龍之介「杜子春」の比較

以上の二作品は、近代的な人道主義をテーマに描いた芥川の「杜子春」のほうが、現代に生きる学生にとって共感の呼びやすい作品である。そのため李復言の「杜子春伝」だけを授業で取り上げた場合、ほとんどの学生はそのテーマを明確に把握することができず、ひいては芥川の「杜子春」のテーマと混同するというケースが見られるのであろう。

これを受けて、筆者は「杜子春伝」のテーマを明確にするために、授業において二作品の比較を行い、その相違点を細かく指摘し、さらにそれらの考察をおこなった。二作品の相違点は数多くあるが、授業ではテーマの理解に関わる以下の5点を取りあげた。以下、文の煩雑をさけるため、李復言「杜子春伝」を<李復言>、芥川「杜子春」を<芥川>と表記することにする。

#### (1) 老人の正体

二作品は、キーパーソンとして杜子春に金を与える不思議な老人が登場しているが（ただし<芥川>のほうは金ではなく黄金を与えている）、その老人の正体には違いがあった。<李復言>のほうは、老人の正体は道士であり、仙薬を開発するなど、上仙を目指して修行を積んでいる人物である。それに対して<芥川>のほうは、すでに上仙を果たした仙人という設定になっている。

#### (2) 杜子春の申し出と、道士／仙人の態度

そして二作品はいずれの場合も、この道士／仙人は3回にわたって杜子春に金を与えており、杜子春は2回目までは贅沢をして使い果すことになるが、3回目になるとそれまでと異なる反応を示すことになる。この反応が二作品では異なっていた。<李復言>の場合は、道士に対する感謝の気持ちから、道士の手伝いをしたいと申し出る。そして<芥川>の場合は、金を受け取るのを拒否し、自分が裕福か貧乏かで態度を変える周囲の人間に失望し、厭世的な感情から自分も老人のように仙人になりたい、と言いだすのである。

そして、こうした杜子春の申し出に対する道士／仙人の態度も二作品の間では異なっている。<李復言>の場合は、杜子春の申し出に満足した様子で、「それでわしも満足じゃ。…（中略）…来年の中元の日、華山にある老君の神木、二本の檜の下までおいで」と積極的に約束を取り付ける。それに対して<芥川>の場合は、まず杜子春が金の受け取りを拒否すると、仙人は非常に感心した様子でこのように言う。「お前は若い者に似合はず、感心に物のわかる男だ。貧乏をしても、安らかに暮らしていくつもりか」と。しかし、その後杜子春が「仙人になりたい」と言うと、仙人は「眉をひそめた儘、暫くは黙つて、何事か考へてゐるやう」な態度を取っている。結局、仙人は杜子春が上仙する手助けをすることになるが、それに対して積極的な気持ちを持っていない様子が描かれているのである。

#### (3) 杜子春が約束を破った理由

その後、二作品いずれの場合でも、杜子春は道教の名山（華山／峨眉山）に連れていかれ、道士／仙人から、決して声を出してはいけないという試練を与えられる。最終的にはいずれの作品でもそれを破ってしまうことになるが、杜子春が声を出してしまう理由に違いがあった。<李復言>の場合は、女に生まれ変わった杜子春が子供を産み、痲癩をおこした夫が子供を石にたたきつけて殺してしまった瞬間に、杜子春は思わず声を出してしまう。母としての子への愛から声を出してしまうのである。それに対し<芥川>のほうは、閻魔大王によって痛めつけられている自分の母親が、「こんな苦しみの中にも、息子の心を思ひやつて、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む気色さへも見せない」という様子をみた杜子春が、母の愛に感動して声を挙げてしまうのである。

#### (4) 約束を破った杜子春に対する道士／仙人の態度

いずれの作品も、約束を破って声を出してしまった杜子春に対する道士／仙人の態度が描かれているが、それ

4 テキストは「杜子春」（『芥川龍之介全集』4巻、岩波書店、1977年11月、150～166頁）を使用した。

は対照的なものであった。〈李復言〉では、杜子春が声を出したことにより、上仙のための仙薬の作製が失敗してしまったため、道士は激怒し、「貧乏書生め、わしをこんな目に合わせおった」と杜子春をののしっている。そして次のように言う。「はて、仙人の才は得難いものじゃなあ。わしの薬は練り直すこともできるが、貴公の身はやはり俗世の厄介にならねばならぬ」と。そして杜子春を気にかけることなく、すぐに追い返してしまうのである。

これに対し〈芥川〉では、杜子春に対して、「もしお前が黙つていたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまはうと思つてゐたのだ」と言っており、仙人は声を出してしまった杜子春に対し肯定的な評価をしていたことがわかる。さらに、仙人は杜子春がその後どのように身を処していくかを尋ねており、杜子春が「人間らしい、正直な暮らしをするつもり」だと答えると、それを満足そうに受け止めているのである。

#### (5) 杜子春のその後

二作品は杜子春のその後についても違いがあり、〈李復言〉のほうは、次のように描写されている。「〔杜子春は〕家に帰ってからも道士との誓約を忘れたことが恥づかしくてならず、過ちをつぐなうためにもう一度努力してみようと〔華山の〕雲台山に登ったが、人の通る道はどこにもない。無念の思いに嘆息しながら引き返したのだった」と。杜子春は自分が試練を破ってしまったことに対して深く後悔しており、上仙に対して未練を残しているのである。

これに対して、〈芥川〉のほうの杜子春は、仙人に対して「〔仙人に〕私はなれなかつたことも、反つて嬉しい気がするのです」と述べており、今後は「人間らしい、正直な暮らしをするつもりです」と言っている。その杜子春の声には「今までにない晴れ晴れした調子が罩つてゐました」とあり、杜子春は上仙に対して未練はなく、明るい気持ちで人間らしい生活を目指すことを決心したようである。

#### 道士／仙人の意図——物語のテーマとは

以上の相違点を踏まえ、授業ではそれぞれの物語のテーマを読み取っていった。その上で注目したのは、道士／仙人の意図とは何だったのかということである。なぜ彼らは杜子春に3度も金を与えたのか。これを考察しながら、次のようにテーマを導き出した。

〈李復言〉においては、上仙のための仙薬を作るには、一切の感情を持たない人間が必要だとされている。道士は長安の街で乞食同前になっていた杜子春に目をつけて、彼に贅沢と貧乏を何度も経験させ、人間に幻滅させ

ることによって、仙薬の材料にしようとしたのである。しかし結局は、杜子春は母としての子への愛だけは捨て去ることができず、念願の上仙はかなわなかった。そのため道士は激怒し、杜子春自身も後悔し未練を残しているのである。このことからこの作品は、上仙への執念や、上仙がいかに難しいかを語ったものであることがわかる。

これに対して〈芥川〉のほうは、仙人は杜子春に贅沢と貧乏を何度も経験させることにより、贅沢の虚しさを思い知らせ、それによって杜子春が悔い改めて、貧乏でも人間らしい、ささやかな生活を志すようにさせたかったのである。仙人は、人間は人間性を捨てるべきでない、と考えていたのである。最後に杜子春もこれを悟って、晴れ晴れとした明るい気持ちで人間らしい生活することを決心している。仙人もこの杜子春の選択に満足し、肯定的にとらえている。このことから、この作品のテーマは、人間は人間性を捨てるべきでないという、人道主義を語ったものであることがわかる。

#### 四. 日中比較文学の効果——学生の反応

授業においては、以上のような相違点とテーマの違いを考察したうえで、「杜子春伝」の背景にある時代性、文化的背景を説明した。こうした作業を行った結果、以下のような学生たちの反応があり、「杜子春伝」に対する読解が深まっただけでなく、日中比較文学の方法にも大きな関心が寄せられることとなった。

##### (1) アンケート結果

筆者は授業後、出席者30名を対象に記述式アンケートを行った。それによれば、すべての回答で比較考察が「杜子春伝」の読解に効果的であったと述べている。

アンケートでは、例えば次のように述べている。もし「杜子春伝」を単独で読んだのであればそのテーマを理解することは難しかったが、比較を通して把握することができたと感じた。二作品のそれぞれのあらすじを聞いただけでは理解が曖昧であったが、細かく比較していくと多くの相違点が見つかり、類似した内容でありながら全く別の物語であることがわかった。比較を通してテーマの違いを明確に把握することができ、その上でその時代性や文化的背景の解説を受けたので納得がいった、などである。

##### (2) 学生のレポート課題から

「杜子春伝」についての読解は、全15回の授業のうち1回分に相当する時間を割いただけであった。しかし、学期末に学生に課したレポートでは、テーマを自由に選ばせたにもかかわらず、半数に近い学生が日中比較文学

をテーマに選び、優れた考察を行った。レポート提出者の総数は29名であったが、授業で取り扱った李復言「杜子春伝」と芥川「杜子春」の比較について取り上げたものが9名にもなった。そのほか、中国の小説とそれを翻案した日本の小説を独自に調査してとりあげ、比較考察した学生が5名あった。例えば唐代の伝奇小説である李景亮「人虎伝」と中島敦「山月記」、明代の文言小説である瞿佑「牡丹籠記」（『剪灯新話』に所収）と上田秋成「吉備津の釜」（『雨月物語』に所収）、清代の文言小説である蒲松齡「酒虫」（『聊齋志異』に所収）と芥川龍之介「酒蟲」である。いずれも二作品を詳細に比較考察し、その相違点から時代性や文化的背景を導き出す独創的なレポートであった。その多くが、授業で日中比較文学を取り上げたのをきっかけに発想を得ており、またその検討の過程で中国と日本の文学的なつながりに気づいたとしている。

#### おわりに

唐代の伝奇小説は、中国文学史上において重要な位置を占めており、その簡潔な文体、内容的な面白さからも、漢文教育の教材として欠かせないものである。しかしその物語に描かれる時代性や文化的背景が現代とあまりにかけ離れているために、漢文教育の場においてはそのテーマの読解の点で学生の理解を得るのが難しいものになっている。筆者はこの点に着目し、唐代伝奇「杜子春伝」の読解を深めるために、日中比較文学の取組みをおこなった。日本の近代文学である芥川龍之介「杜子春」と比較し、その相違点を考察することによって、「杜子春伝」のテーマを導き出す作業を行ったのである。その結果、学生たちの「杜子春伝」に対する読解が深まっただけでなく、日中比較文学の方法にも大きな関心が寄せられることとなった。また学生たちはこの過程で中国と日本の文学的な連続性にも気付いており、日中比較文学の取組みは、これを体得させるためにも有効だと考えられる。